（様式）

助成事業完了報告書

宛　先：日本財団

報告日付：　2009年　４月　7日
事業ID：2007607794
事業名：バイリンガル・バイカルチュラル
ろう教育の調査研究
団体名：学校法人　明晴学園
代表者名：理事長　米内山明宏
TEL：03-6380-6775
FAX：03-6380-6751
事業完了日：　2009年　3月　31日

事業費総額	5,016,453	円
助成金額	4,000,000	円

事業内容：（「何を、いつ、どこで、どのように」実施したのかを具体的に記入して下さい。）

2008年4月に明晴学園が開校し、日本ではじめての「日本手話と書記日本語によるバイリンガル・バイカルチュラルろう教育」が始まった。そこで、今年度は１.調査、２.指導者育成、３.周知、４.報告書作成の4つの事業を通して、バイリンガル・バイカルチュラルろう教育の新しい教育課程による授業実践の研究を行った。

本校の教職員が中心になってバイリンガル教育に関する知識を高め、教育課程のあり方や実践の方法について研究した。幼児・児童の手話や日本語の習得の様子、日々の授業実践などについての情報交換や記録をし、また勉強会等で学んだことを職員間の話し合いで更に深めるなどして、実践を積んだ。

バイリンガル教育を指導できる人材の育成は、本校の最重要課題である。そのための勉強会を行い、ろう教育だけでなく、聴児のバイリンガル教育や小学校の指導方法等の研修も行った。海外からの講師も多く、当初の予定のように定期的ではなく、突発的な講演になることもあったが、実際にバイリンガル校への訪問も実現し、多岐にわたって研修をすることができた。具体的な内容は下記のとおりである。

6月4日　「Drury校のASL診断テストの実践とその診断ツールについて」
講師：トロント大学名誉教授　中島和子先生

7月4日　「教材の活用法」
講師：目黒区立東根小学校教諭　石川裕美先生

7月25日　「Drury校幼児クラスの空間配置と学習教材」
講師：トロント大学名誉教授　中島和子先生
「New International School Teddy Bear Classについて」
講師：慶應義塾大学教授　古石篤子先生
「マルチレベルクラスの教授法について」
講師：トロント大学名誉教授　中島和子先生
7月29日　「自己評価について」
東京学芸大学附属竹早小学校　訪問
8月27日　「外国人ろう者に対する日本語指導」
講師：亜細亜大学非常勤講師　佐藤啓子先生他
10月1日　ＮＩＳ（New International School）　訪問
校長先生より学校の概要・意義・バイリンガル教育について講義
11月19日　「マルチエイジ教育」
講師：北アリゾナ大学教育学部　主任教授　サンドラ・ストーン先生
11月26日　「バイリンガル教育の教材と資源及び言語評価」
講師：ギャローデット大学准教授　Ｅ・リン先生
2月25日　「カナダのバイリンガル教育」
講師：カナダ　オンタリオ州立ろう学校総括校長　ヘザー・ギブソン先生

2月28日、3月1日の2日間「イリンガル・バイカルチュラルろう教育シンポジウム」を開催し、本校の授業研究の成果と課題について取り上げるとともに、海外から講師を招聘し国内外のバイリンガルろう教育の現状と課題についてシンポジウムを行った。会場の関係で一般参加者は200名、関係者を合わせると250名ほどが参加し大変盛況であり、問い合わせも多く明晴学園への関心の高さが伺われた。

１日目は記念講演、研究発表、パネルディスカッションの3部構成で行われ、明晴学園の教育、これからの日本のろう教育にどんな貢献ができるか活発な議論がされた。2日目は授業公開を行い、学校として新たなスタートを切った明晴学園の授業が一般に公開されたのはこれが初めてで大きな反響を呼んだ。研究の内容は予稿集としてまとめ、公開授業での発表はＤＶＤとして作成した。

バイリンガルろう教育の周知・啓蒙に関してはシンポジウムだけでなく、ニュースレターの発行やＨＰへの投稿などを通して、一般の人々やろう教育関係者、ろう児の保護者にも知らせていくことができた。

事業目標の達成状況：（目標の達成状況、事業成果、成功／失敗の要因を自己評価して下さい。）

これまでＮＰＯ法人として何度か助成事業を行い、バイリンガル教育についての研究会を開催してきた。その成果もあり、一般の人々に日本手話による教育の必要性が認められ、明晴学園の開校につなげることができた。そうして本校が誕生し、今度はその教育の中味を一般に啓蒙してことが重要だと考え、今年度の研究のテーマとして助成事業に取り組んできた。

学校の開校はマスコミ等でも取り上げられたため、多くの注目を浴び、日本手話による教育やバイリンガルろう教育、さらには「ろう者」の存在を広く知ってもらうことができた。ろう学校からの見学の申し込みやシンポジウムへの参加申し込みも多く、それだけで

も社会の見方を少し変えることができたのではないかと思う。
　当初の目標では、広くろう学校の教員養成も含める予定をしていたが、開校したばかりで余裕がなく、本校の教職員や大学等研究機関の専門家を中心とするものとなってしまった。しかし、前述のようにシンポジウムにはろう学校の教員からの申し込みや問い合わせが大変多く、ろう学校の先生達もバイリンガル教育への関心を広げることができたと思われる。
　始まったばかりの学校で、まだまだ試行錯誤の段階ではあるが教育の内容をオープンにしてくことにより、外からの刺激を受けたり、ろう教育関係者以外からの助言を受けたりでき、新しい教育課程を十分に活かした実践研究を行うことができた。今後はこれらの研究データをより多く集め、より研究を深めていきたい。手話の分析的研究や評価基準、それに沿った発達プログラムや教材の開発、同様に日本語習得のカリキュラム等、まだまだ課題は山積みであるが、これらの研究を積み重ねていくことでろう児にとって最もふさわしい教育方法が実現できると考える。

事業成果物：（作成した報告書・印刷物・ビデオなどの名称、部数を記入して下さい。）

　バイリンガル・バイカルチュラルろう教育シンポジウム予稿集
　ポスター
　学校案内資料
　ＨＰ作成
　ＤＶＤ作成
　ニュースレター